舌切りすずめ

楠山正雄

青空文庫

一

むかし、むかし、あるところにおじいさんとおばあさんがありました。

子供がないものですから、おじいさんはすずめの子を一羽、だいじにして、かごに入れて飼っておきました。

ある日おじいさんはいつものように山へしば刈りに行って、おばあさんは井戸ばたで洗濯をしていました。その洗濯に使うのりをおばあさんが台所へ忘れていった留守に、すずめの子がちょろちょろかごから歩き出して、のりを残らずなめてしまいました。

おばあさんはのりを取りに帰って来ますと、お皿の中にはきれいにのりがありませんでした。そののりはみんなすずめがなめてしまったことが分かると、いじのわるいおばあさんはたいへんおこって、かわいそうに、小さなすずめをつかまえて、むりに口をあかせながら、

「この舌がそんなわるさをしたのか。」

と言って、はさみで舌をちょん切ってしまいました。そして、

「さあ、どこへでも出ていけ。」

と言って放しました。すずめは悲しそうな声で、「いたい、いたい。」と鳴きながら、飛んでいきました。

夕方になって、おじいさんはしばを背負って、山から帰って来て、

「ああくたびれた、すずめもおなかがすいたろう。さあさあ、えさをやりましょう。」

と言い言い、かごの前へ行ってみますと、中にはすずめはいませんでした。おじいさんはおどろいて、

「おばあさん、おばあさん、すずめはどこへ行ったろう。」

と言いますと、おばあさんは、

「すずめですか、あれはわたしのだいじなのりをなめたから、舌を切っておい出してしまいましたよ。」

とへいきな顔をして言いました。

「まあ、かわいそうに。ひどいことをするなあ。」

とおじいさんは言って、がっかりした顔をしていました。

二

おじいさんは、すずめが舌を切られてどこへ行ったか心配でたまりませんので、あくる日は、夜があけるとさっそく出かけていきました。おじいさんは道々、つえをついて、

「舌切りすずめ、
お宿はどこだ、
チュウ、チュウ、チュウ。」

と呼びながら、あてもなくたずねて歩きました。野を越えて、山を越えて、また野を越えて、山を越えて、大きなやぶのある所へ出ました。するとやぶの中から、

「舌切りすずめ、
お宿はここよ。
チュウ、チュウ、チュウ。」

という声が聞こえました。おじいさんは喜んで、声のする方へ歩いていきますと、やがてやぶの陰にかわいらしい赤いおうちが見え

て、舌を切られたすずめが門をあけて、お迎えに出ていました。

「まあ、おじいさん、よくいらっしゃいました。」

「おお、おお、ぶじでいたかい。あんまりお前がこいしいので、たずねて来ましたよ。」

「まあ、それはそれは、ありがとうございました。さあ、どうぞこちらへ。」

こう言ってすずめはおじいさんの手をとって、うちの中へ案内しました。

すずめはおじいさんの前に手をついて、

「おじいさん、だまってだいじなのりをなめて、申しわけがございませんでした。それをおおこりもなさらずに、ようこそたずねて下さいました。」

と言いますと、おじいさんも、

「何の、わたしがいなかったばかりに、とんだかわいそうなことをしました。でもこうしてまた会われたので、ほんとうにうれしいよ。」

と言いました。

すずめはきょうだいやお友だちのすずめを残らず集めて、おじいさんのすきなものをたくさんごちそうをして、おもしろい歌に合わせて、みんなですずめ踊りを踊って見せました。おじいさんはたいそうよろこんで、うちへ帰るのも忘れていました。そのうちにだんだん暗くなってきたものですから、おじいさんは、

「今日はお陰で一日おもしろかった。日の暮れないうちに、どれ、おいとまとしましょう。」

と言って、立ちかけました。すずめは、

「まあ、こんなむさくるしいところですけれど、今夜はここへとまっていらっしゃいましな。」

と言って、みんなで引きとめました。

「せっかくだが、おばあさんも待っているだろうから、今日は帰ることにしましょう。またたびたび来ますよ。」

「それは残念でございますこと、ではおみやげをさし上げますから、しばらくお待ち下さいまし。」

と言って、すずめは奥からつづらを二つ持ってきました。そして、

「おじいさん、重いつづらに、軽いつづらです。どちらでもよろしい方をお持ち下さい。」

と言いました。

「どうもごちそうになった上、おみやげまでもらってはすまないが、せっかくだからもらって帰りましょう。だがわたしは年をとっているし、道も遠いから、軽い方をもらっていくことにしますよ。」

こう言っておじいさんは、軽いつづらを背負わせてもらって、

「じゃあ、さようなら。また来ますよ。」

「お待ち申しております。どうか気をつけてお帰り下さいまし。」

と言って、すずめは門口までおじいさんを送って出ました。

三

日が暮れてもおじいさんがなかなかもどらないので、おばあさんは、

「どこへ出かけたのだろう。」

とぶつぶつ言っているところへ、おみやげのつづらを背負って、

おじいさんが帰って来ました。

「おじいさん、今ごろまでどこに何をしていたんですね。」

「まあ、そんなにおおこりでないよ。今日はすずめのお宿へたずねて行って、たくさんごちそうになったり、すずめ踊りを見せてもらったりした上に、このとおりりっぱなおみやげをもらって来たのだよ。」

こう言ってつづらを下ろすと、おばあさんは急ににこにこしながら、

「まあ、それはようございましたねえ。いったい何が入っているのでしょう。」

と言って、さっそくつづらのふたをあけますと、中から目のさめるような金銀さんごや、宝珠の玉が出てきました。それを見るとおじいさんは、とくいらしい顔をして言いました。

「なにね、すずめは重いつづらと軽いつづらと二つ出して、どちらがいいというから、わたしは年はとっているし、道も遠いから、軽いつづらにしようといってもらってきたのだが、こんなにいいものが入っていようとは思わなかった。」

するとおばあさんは急にまたふくれっ面をして、

「ばかなおじいさん。なぜ重い方をもらってこなかったのです。その方がきっとたくさん、いいものが入っていたでしょうに。」

「まあ、そう欲ばるものではないよ。これだけいいものが入っていれば、たくさんではないか。」

「どうしてたくさんなものですか。よしよし、これから行って、わたしが重いつづらの方ももらってきます。」

と言って、おじいさんが止めるのも聞かず、あくる日の朝になるまで待たれないで、すぐにうちをとび出しました。

もう外はまっ暗になっていましたが、おばあさんは欲ばった一心でむちゃくちゃにつえをつき立てながら、

「舌切りすずめ、
お宿はどこだ、
チュウ、チュウ、チュウ。」

と言い言いたずねて行きました。野を越え、山を越えて、また野を越えて、山を越えて、大きな竹やぶのある所へ来ますと、やぶの中から、

「舌切りすずめ、
お宿はここよ。
チュウ、チュウ、チュウ。」

という声がしました。おばあさんは「しめた。」と思って、声のする方へ歩いて行きますと、舌を切られたすずめがこんども門をあけて出てきました。そしてやさしく、

「まあ、おばあさんでしたか。よくいらっしゃいました。」

と言って、うちの中へ案内をしました。そして、

「さあ、どうぞお上がり下さいまし。」

とおばあさんの手を取っておざしきへ上げようとしましたが、おばあさんは何だかせわしそうにきょときょとと見まわしてばかりいて、おちついて座ろうともしませんでした。

「いいえ、お前さんのぶじな顔を見ればそれで用はすんだのだから、もうかまっておくれでない。それよりか早くおみやげをもらって、おいとましましょう。」

いきなりおみやげのさいそくをされたので、すずめはまあ欲の深

いおばあさんだとあきれてしまいましたが、おばあさんはへいきな顔で、

「さあ、早くして下さいよ。」

と、じれったそうに言うものですから、

「はい、はい、それではしばらくお待ち下さいまし。今おみやげを持ってまいりますから。」

と言って、奥からつづらを二つ出してきました。

「さあ、それでは重い方と軽い方と二つありますから、どちらでもよろしい方をお持ち下さい。」

「それはむろん、重い方をもらっていきますよ。」

と言うなりおばあさんは、重いつづらを背中にしょい上げてあいさつもそこそこに出ていきました。

おばあさんは重いつづらを首尾よくもらったものの、それでなくっても重いつづらが、背負って歩いて行くうちにどんどん、どんどん重くなって、さすがに強情なおばあさんも、もう肩が抜けて腰の骨が折れそうになりました。それでも、

「重いだけに宝がよけい入っているのだから、ほんとうに楽しみだ。いったいどんなものが入っているのだろう。ここらでちょいと一休みして、ためしに少しあけてみよう。」

こう独り言を言いながら、道ばたの石の上に「どっこいしょ。」と腰をかけて、つづらを下ろして、急いでふたをあけてみました。

するとどうでしょう、中を目のくらむような金銀さんごと思いの外、三つ目小僧だの、一つ目小僧だの、がま入道だの、いろいろなお化けがにょろにょろ、にょろにょろ飛び出して、

「この欲ばりばばあめ。」と言いながら、こわい目をしてにらめっけるやら、気味の悪い舌を出して顔をなめるやらするので、もうおばあさんは生きた空はありませんでした。

「たいへんだ、たいへんだ。助けてくれ。」

とおばあさんは金切り声を上げて、一生懸命逃げ出しました。そしてやっとのことで、半分死んだようにまっ青になって、うちの中にかけ込みますと、おじいさんはびっくりして、

「どうした、どうした。」

と言いました。おばあさんはこれこれの目にあったと話して、

「ああもう、こりごりだ。」と言いますと、おじいさんは気の毒そうに、

「やれやれ、それはひどい目にあったな。だからあんまりむじひなことをしたり、あんまり欲ばったりするものではない。」と言いました。

青空文庫情報

底本：「日本の神話と十大昔話」講談社学術文庫、講談社
1983（昭和58）年5月10日第1刷発行
1992（平成4）年4月20日第14刷発行
入力：鈴木厚司
校正：大久保ゆう
2003年8月27日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

舌切りすずめ

楠山正雄

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/